

目標は世界をリードする人財の育成 子供たちの無限の可能性を 四谷大塚が飛躍的に引き上げる

これまで一回にわたってお届けしてきた「四谷大塚の挑戦」。今回はいよいよ四谷大塚の代表取締役である永瀬昭幸氏の登場です。永瀬社長の考える教育理念とは？ 四谷大塚の究極の目標とは？ 熱い教育論を語ります。

教育の最終ゴールは世の中で活躍できる力をつけること

——未来を担うリーダーを育てることを教育の理念として掲げておられますが、それは、教育事業を始めたときから変わらないのでしょうか。

長く教育に携わってきたプロセスのなかで、私自身も変わったと思います。当初は、生徒の能力を十分に伸ばして第一志望校に受からせてあげるところから始めました。しかし、東大に合格するにしても、それは人生というマラソンでいえば途中経過です。素晴らしい記録だが、あくまでラップタイムに過ぎない。そこで、教育の最終ゴールは何かと自問してみると、やはり、世の中に出た後で活躍できる力をつけて

あげることだと思うようになりました。——親としては、もっと近視眼的に、とかく学校の名前が気になりますか。

たしかに、名前の通った学校に入りたいというご希望はあります。でも、その親御さんたちの心の中にある思いというのは、わが子が将来、実社会に出て、幸せな人生を送ってほしいということでしょう。社会で活躍し、世の中の役に立つてほしいと願っています。

——たしかにその通りです。

そういう観点で現在を見れば、世界的な不況や新型インフルエンザの流行など、もはや日本の中だけで考えるときではない。求められている基準は世界基準なんです。つまり世界のために役に立つ人、世界をリードしていく人が求められている。そして、実際に今、活躍している世界のリーダーたちは、子供の頃から、心、知、体、すべてを鍛えていますよ。

——日本の子供たちにもそれが必要なんです。

例えば英語の勉強をするとき、覚えるべき単語の数を一〇〇〇にするか

二〇〇〇にするかなどと考えても意味はないでしょう。なんら不自由なく英語で円滑なコミュニケーションを取るためには、おそらく三万語くらいが必要です。つまり、いくつ覚えるかではなくて、コミュニケーションができることを目標にしないといけない。英語で交渉し、相手を説得し、納得させることができたからこそ、英語を学んだ甲斐があったというレベルを、どうしてイメージしないのか。それをせずに、入試のためだけに英語をやるから、英語がおもしろくならないのです。

子供たちの無限のポテンシャルを伸ばしていくために

——早い時期から、目的を見据えた教育が求められるわけですね。

日本は今、少子高齢化が進み、若い人財が頑張らないと国家財政も破綻しかねない。この状況を打破するには、企業なら社員を、国家なら国民を鍛えるしかないし、実際にそれを行っている国もあります。だから私は、日本の小学生のレベルを飛躍的に引き上げて



小学生のうちから競い合い、努力することの大切さを説く永瀬社長

わけですね。

子供たちのポテンシャルは無限です。そして、人の能力を伸ばすという観点では、素質よりも後天的な環境や、そこで積み上げる努力のほうがはるかに大事です。テストのときに、限られた時間内で知識をフル動員するか子供たちの学力が伸びる。これは東進ハイスクールでも同様で、受講後の確認テストを行うから、高い学習効果が得られる。そうした努力をするための環境が大事です。

——テストの結果を、VOD（ビデオ・オン・デマンド）を用いた解説授業でもフォローされています。

世界に貢献できる人財を育てる

——それが教育の醍醐味

——そうして子供たちの無限のポテンシャルを開花させていくわけですね。

私は、子供たちには限界を設けないほうがいいと思っています。小学生で大学に受かる人がいてもいい。多くのノーベル賞クラスの発明発見が生まれるのは、研究者が二十代の後半のときですね。そこから逆算すれば、より早い時期に豊かな知識を身につけていて不思議ではない。ノーベル賞とまでいなくても、世の中に大きく貢献できる仕事を成そうと思えば、努力、訓練、鍛錬を要するのは当然のことです。さらに言えば、そうした努力や鍛錬を通じて、この国の将来をリードし、世界に貢献できる「人財」を生み出すことができます。しかもそれは一人ではなく、一〇〇人、一〇〇〇人、一万人と生み出していくことができる。それが教育の醍醐味です。

——そこに四谷大塚の果たすべき役割があるわけですね。

創業期の四谷大塚の教材を見て驚き

いきたい。そのプロセスのなかで、四谷大塚という進学塾が重要なポジションを担っていると思います。

——四谷大塚が主催する「全国統一小学生テスト」のインパクトも大きいですね。

「全国統一小学生テスト」では、勉強する環境に恵まれた首都圏の小学生とそうでない地方の小学生とが平等に競い合う機会をつくりました。地方の子供たちは、その結果から、自分が今、全国でどのくらいのレベルにいるかわかります。



ました。よくぞここまで高いレベルの教材を小学生たちに与えたものだなにしろ大学入試にあってもおかしくないくらいの教材内容が含まれているのですから。この国の先端で活躍されている方々の中には、かつて四谷大塚で学んだ人が少なくない。予習シリーズを通じて自分の頭で考えることを覚え、そのことで勉強が苦ではなくなり、ひいてはそのときの蓄積が今日につながっているという方々に、私はぜひぶんとたくさんお目にかかっています。

株式会社四谷大塚 代表取締役社長 永瀬昭幸

私立ラ・サール高校、東京大学経済学部卒。東大在学中に自宅アパートで「ナガセ進学教室」をスタート。卒業後、野村證券を経て、1976年に株式会社ナガセを設立し、同社代表取締役社長に就任。1985年に東進ハイスクールを創設。1988年に株式店頭公開（現JASDAQ上場）。現在、大学受験の東進ハイスクール・東進衛星予備校の理事長のほか、ナガセグループである四谷大塚、入江陵介選手をはじめ、世界レベルのスイマーを多く輩出するイマンスイミングスクールの社長・理事長を務める。

四谷大塚について

1954年創立。首都圏を中心に、多数の合格者を有名中学に送り出してきた進学塾。中学受験最強の教科書「予習シリーズ」、全国最大となる2万人を超える受験生が競う「合不合判定テスト」、首都圏の直営17校舎での質の高い「レベル別指導」、そして豊富な「教育情報」を提供してきました。また、首都圏で定評のある「四谷大塚」のノウハウを生かして、日本全国の有力塾や東進衛星予備校の加盟校との新ネットワーク「四谷大塚NET」のサービスを展開しています。

四谷大塚は50年以上の歴史をもつ中学受験のバイオニアです

でこい、未来のリーダーたち。

四谷大塚 
www.yotsuyaotsuka.com